

# 貞丈雜記

膳部 酒盃  
與類

七

一六八〇一	和書門
冊架函號類	

庫文閣内	和書
一五三函	二〇七八一
一七架	冊架函號類

内閣文庫	
番號	和 20781
冊數	16 ( 7 )
函號	153 278



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



雜記才七

悟部之部

酒盃類之部

輿類之部

花廼家文庫

淺草文庫



雜記才七

悟神

以能飲食能と合也  
乃名七卷丁方のより

伊勢平系貞丈記

一 合子とも合子とも云は杖のての身とふと合子とも合子の名  
あり合子とも合子とも云は杖のての身とふと合子とも合子の名  
あり合子とも合子とも云は杖のての身とふと合子とも合子の名  
あり合子とも合子とも云は杖のての身とふと合子とも合子の名



ハ平キ已げ物の代りも作らるるつる魚ハつふあまき已げ  
物の代りも吉に已げ物を申しつる今の平さつふ不皿の四つ  
は細き筋をさく付らるる已げ物よりつるをいふをまの  
しるころつと細き筋をさく付らるる已げ物よりつるをいふをまの  
のりよ已げ物の筋をさく付らるる已げ物よりつるをいふをまの  
程程ハ皆白あまき合子ハつる已げ物のりて已げ物のりて

ヒキレト云  
ハ本のヒキ  
ヲ入抄ウ  
作名ハ板  
各ハヒキ  
ヒキレト云  
入ト云略シ  
ヲヒキレト  
云ハルハ  
則合子  
ノイハ  
蔵人等  
吾合子  
ヒキレウ  
リノ詞  
コトハ  
ガウシ  
ニテメセ  
云















木鼻は三方四方借食も木鼻は細き今ハ豆付の事  
をうり木鼻と云ふ

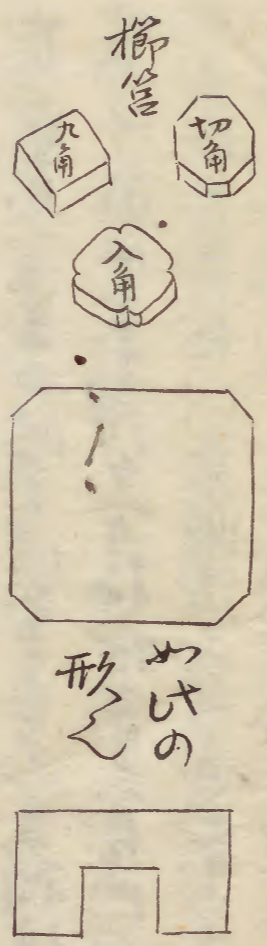
一 豆付を足折とも云折敷も足を折付る形は豆付の  
折敷と云ふを界して足付足折と云ふ

一 折敷ともハ足折とも云ふ豆付のみを折敷とも云ふ  
あり豆付の折敷あるは折敷とも云ふ

一 板平ともハ板を薄く板平とも云ふまをけつてす  
作りしは折敷を云

管の角ニ  
名ソウ  
名雅亮  
紫米抄  
出造紙  
管紙

一 かんあけ又うあけとも云ハ板をさし板よかんあけ  
てうろくくけはくして作りしは折敷を云  
一 角の折敷とも又ハ角とも云ハ四方正この角を切り  
折敷のりし



足形ハ丸ハ  
くりしあり  
折敷ハ丸ハ足付タル  
足付ト云今ハ足折ト云

一 小角と云ハ左の角折敷を三寸四方ありし中角を奪  
り方ありたる大角と云ハ八寸四方之角を八寸といふ  
一 平折敷ともハ四角のかとを切りしハ角のまはるは  
角の折敷のりし付るりもあへし用依へし  
一 角切らすともハ平折敷のりし東山版年中行りた  
傾直後角不ト云るりありありと云ふ  
一 そむ折敷ともハ角切りすまて足よハくりしあまを







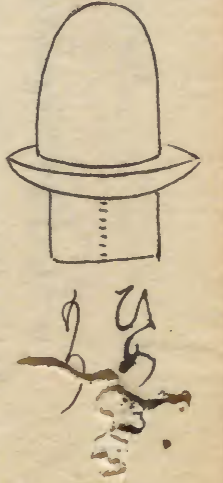
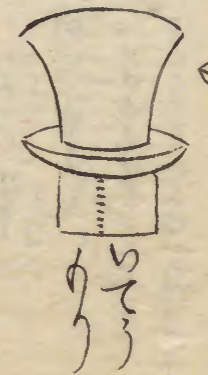
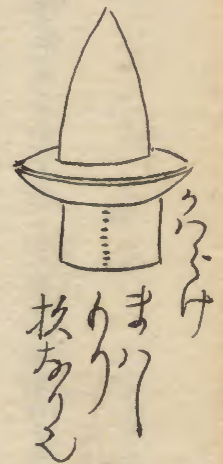
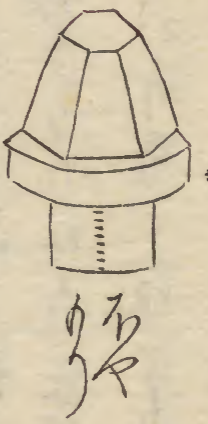
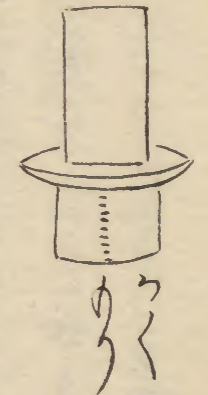








いん 盤也  
食盤  
ハ格  
ハ格  
ハ格



一 巾むんとしてハ格新よて出格をのせましく蓋のさし

一 巾てししーとしてまも蓋不よて出格子ひさげをのせましく

一 蓋のさしーとして 島山或は榊をすく蓋にたよ出んとして出てししーとして

一 めーをのせましくーのさしをばいおがいとまもすめ之飯七

一 とかーとじいさーとしてまもめーのさしとまもハりるういと

一 りてとまもすめ出格物格もつてししー

一 めーをもちめーつてまもまもまもまもまもまもまもまもまも

飯櫃とまもいひひつハ○おびある形ある飯櫃長くたまね  
をいひひつ形とまも器としていびつありたし

一 巾とりまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも  
巾のお 巾のお とまもまも 巾のお とまもまも 巾のお とまもまも 巾のお とまもまも

純くはまも

一 饅飽又混飽ともま小麦の形よて圓子の如く作る之中ま

一 あんをいひまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

一 巾も巾のあまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

一 巾の三水を改て食扁又文字をまも混飽ハ括くまも

一 て食する飯温の字を付て温飽ともまもまもまもまもまも

一 あまの如くあまの如くの新あまは痛を入んとなをりまも

日本一  
神代巻  
ニ混飽  
ニ字  
ニロカシ  
タルト  
ヨム











右の如く上古の神代より先まゝの器も入れず用ゝれと  
つひよまゝの器も入れず用ゝれと  
大御流はハママも一の先をばけす所のやうある  
を器の先まゝに入れしをばけすとの他流のこゝ  
族を長くおのしるを儀の先まゝ入れぬをこゝのやう成  
るゝを器の先まゝに入れしハ祈の如く懸きこゝを儀の  
先まゝ入るを云ぬり

一 倍を上古ハか<sup>柏</sup>まてと云ふハ神代ハハハの物をかまの  
事ありしう海ありしもか<sup>柏</sup>まての事ありしと云ふと云ふそれな  
り<sup>シ</sup>はてしと云ふ二條亞相記或人の云倍を訓て加  
之波年と云古ハ柏<sup>シ</sup>まてを用ゝ飲食を<sup>シ</sup>置るは加<sup>シ</sup>之波  
年と名付く<sup>シ</sup>又件摺の神事の時は<sup>シ</sup>云<sup>シ</sup>ハハとて

大なる<sup>シ</sup>その器も神代を法<sup>シ</sup>まてや<sup>シ</sup>その目<sup>シ</sup>をい  
だまの<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>けり<sup>シ</sup>夫木抄略長<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>件摺記を<sup>シ</sup>けり  
と<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>又<sup>シ</sup>異<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>日<sup>シ</sup>本<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>あり  
飲食を<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>傳<sup>シ</sup>へ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>北史と云書卷九<sup>シ</sup>十<sup>シ</sup>日本  
の<sup>シ</sup>由<sup>シ</sup>地<sup>シ</sup>風<sup>シ</sup>俗<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>記<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>俗<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>盤<sup>シ</sup>俎<sup>シ</sup>藉<sup>シ</sup>以<sup>シ</sup>櫛<sup>シ</sup>葉<sup>シ</sup>と  
云<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>盤<sup>シ</sup>俎<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>食<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>載<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>器<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>倍<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>云<sup>シ</sup>櫛<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ら  
し<sup>シ</sup>もの<sup>シ</sup>あり

一 土器<sup>シ</sup>代<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>磁<sup>シ</sup>器<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>三光院内府記云木具<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>器<sup>シ</sup>  
面<sup>シ</sup>向<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>舎<sup>シ</sup>舎<sup>シ</sup>席<sup>シ</sup>祝<sup>シ</sup>儀<sup>シ</sup>必<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>儀<sup>シ</sup>禮<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>ノ<sup>シ</sup>器<sup>シ</sup>  
皆<sup>シ</sup>朱<sup>シ</sup>ノ<sup>シ</sup>或<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>紋<sup>シ</sup>或<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>紋<sup>シ</sup>漆<sup>シ</sup>箔<sup>シ</sup>木<sup>シ</sup>隨<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>青<sup>シ</sup>瓷<sup>シ</sup>或<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>白<sup>シ</sup>茶<sup>シ</sup>碗<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>臣<sup>シ</sup>朝<sup>シ</sup>夕<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>器<sup>シ</sup>  
也<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>切<sup>シ</sup>塗<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>不<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>遠<sup>シ</sup>院<sup>シ</sup>和<sup>シ</sup>名<sup>シ</sup>院<sup>シ</sup>禁<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>舎<sup>シ</sup>第<sup>シ</sup>内<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>時<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>自<sup>シ</sup>長<sup>シ</sup>  
橋<sup>シ</sup>局<sup>シ</sup>朝<sup>シ</sup>夕<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>茶<sup>シ</sup>碗<sup>シ</sup>密<sup>シ</sup>被<sup>シ</sup>召<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>受<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>千<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>臣<sup>シ</sup>規<sup>シ</sup>模<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>に  
續<sup>シ</sup>古<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>儀<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>圓<sup>シ</sup>鞆<sup>シ</sup>院<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>井<sup>シ</sup>何<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>行<sup>シ</sup>あり<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>先<sup>シ</sup>

又<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>リ<sup>シ</sup>  
後<sup>シ</sup>世<sup>シ</sup>抄<sup>シ</sup>  
ア<sup>シ</sup>ラ<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>天<sup>シ</sup>文<sup>シ</sup>  
比<sup>シ</sup>成<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>  
ア<sup>シ</sup>リ<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>永<sup>シ</sup>  
天<sup>シ</sup>文<sup>シ</sup>ノ<sup>シ</sup>比<sup>シ</sup>  
記<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>貞<sup>シ</sup>  
記<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>貞<sup>シ</sup>  
記<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>貞<sup>シ</sup>











也氏後院定うなるす又中院道茂公七年笑 福十記より

敷三枚 様袋盃 又おあ一枚 様袋 瓶子一口 様袋 とつんえんじり 瓶子ト様袋ト置

揚袋とも様袋とも書し源氏も志ろく子のやうきと

あるハ銀もて揚袋の形を作りし物と書め志ろ

くひのやうきとるとの清さうきと何れをこれハやう

交ハ盃をのすろをなめめ又物多揚も様もけぬ

字を用れた揚字ハ字ありんり常の折交類ハ

捨も作りを是ハ揚のあもて作りて揚袋と名付る

捨も作りを類を捨おと云類の名は 葉 葉袋と云説ハ語るは

ちやいとるり京極大弟紙うんの糸さんいのあき不ちや

いの申とありちやいとくく一盃のりしハ尾

刈あもて葉子盃のりしをちやいと云あり

葉子 キヤツ  
撰 キヤツ  
撰 キヤツ

酒盃類之類

一 一斗二斗と云を二盃二盃のりしと云ゆい人五倍之

何れも吸物者あをゆりて盃を喫ハ一斗之次又

吸物も者もも出りて盃を喫是二斗之何れも

ゆけ一斗んゆれハそなと云襦子を入れて一献毎に襦

子をあつためて出さし何れもけぬりし

一 酒を一盃二盃と云ハ何れ人の詞古ハ一盃二盃と云

ららけハ二盃入五盃入と云も二盃入五盃入といふ意

るはけぬりしハ

一 古ハ後院も常もも盃と云ハ皆うけぬり意と云

るハを代のりしハも盃を朱ぬりすてうくひら

るはけぬりしハ  
為の倍程に多し



くすむらういふけをまゐびらる物し京の銀園より七賢の  
亭としてせりまのこきよ晋の七賢の君を結婚するに  
互是ハ東山及の庄堂こと年借らるいふくせ相あり  
東山及時代ぬり互ハあし後し作りけるぬし

一 盃ハ一ツ折あますして出スおこ二盃まゝして出さるすいそ思  
ふしそなぬハ軍陣の時款の大杯の首ぬる時そ首よ  
酒吞する時も又切後するくは酒のまする時も盃二ツま  
出して二献吞するこ常よ二献を忘もけぬし然るも今

一 世上よそは結婚は盃二ツまゝして出ス新多しいまゝあつて  
婚禮の時夫婦を交はるるに男先吞て女も吞する  
古法之男ハ陽カ陰ハ陰ハ貴く陰ハ穢し陽ハ陰ハ  
先しつるす天地の及程し然るも或流は昔ハ男女の家

よ初てそ夜ハとまりて後ハ我家へ迎へ来るされハその時  
女はその家の亭に男ハ客人ぬし友女先吞て男よこし  
此友婚禮の盃ハ女より吞て男よこしおこ女先吞ハ酒  
のいふるなるなと云け後保りしおゆぬるす

一 ありえの御子くさるのてししと今時の人云ハ保てしし  
初さけとさくし

一 酒も客人も初させしをぬぬし客人固く辭退セしむれハ  
亭より初へしそ時亭まゝとをりて集るすししと  
きて吞初へし又客人より吞初らる時ハ款の人たちの  
まゝ酒をかうけていそをりて集るすさうけいそを  
をハ袴よりうけて何とあくのこふへより一四記より  
よりある流は酒ハ我家より作らぬお友ぬ亭より吞



初々毒の今見はる物としりけ説用ゆへら

一 せことさるる大酒りの時毒も靴子も蔵つし出ひあり

糸の中申よ云大勢也と云社奉る意つ靴子二えし

おしひるり暑き云云但常よあきしあ苦しいそれぬ

時あといさもあし礼酒の時ハせことさきいころも

出し靴子あともいくえいも出しひるり常あきし

一 酒の中流ると云ハ今時のあつをするときよ同よ大

申と云ハ申をのむ人の意を別人出て又申をのむる

一 今徳利と云靴を古ハ湯と云らるる昔ハやき靴の徳

利あり皆湯よを征しる友すと云らる

一 柳栂と云ハ柳の末よて征りしるも栂のさる今ハひの

末さるるの末あともて平うたふひのやく征りたるを

浪神代酔  
ニ柳栂  
コフアル

所ヲ以テ  
酒ヲ入ル器

一 兵庫栂  
ト云ハ  
アル栂

一 説ニ錦ニ  
ツクル蚕ノ

蝶ニ成ルガ  
子ヲ多ク

ウムおナル  
ユキヤル

以テ子孫  
繁昌ヲ

祝ヒテ  
香ノ蝶

一 秋ヲ挑  
子ニ成ル

ト云ハ  
は悦嫁礼

ニトリテハ  
ヨシキ

一 三ハ  
イカ

柳栂と云古の柳しるしハちよ遠く古柳を引ひる

ハ柳木ハやいり成末よ水きよあハ末あけらる

栂よしてハ木あけて酒りぬ友柳を寄りし

靴子栂子靴子あとも付る蝶花靴の折靴ハ庖丁人の

するさるる庖丁の流義よりして折靴遠くし靴子を

ひ一靴よ包むるもあきも同前ハ我あき他へ

蝶花靴ひ一靴の折靴ハ京都お家の庖丁人大勢流

の折靴あり

靴子栂子蝶靴を付るるハ蝶ハのしりある日よ出て

弟末の花の露を吸ておのうなと打連栂ひたさるる

抱え入りきやく酒を吞てハ人と申能飲ひ樂むる

は腹しちいさういたるとするハよりらぬるしすれハ酒



香人の蝶の花の姿を吸て枕の糸もむやくせよと  
云教の存よ蝶の形を付多し瓶子よ蝶花形付多し  
同

一 瓶子一對目を蝶花形よ包む時左側のたのりよ左の  
男蝶右の方よ左の女蝶

一 条よ又よは後言の時ハ瓶子の口を蝶花形よ包ます  
ひよ包よと云程多しと何り是ハ瓶子掬子と  
瓶子一對と蝶花形よ包めし蝶の形はよぬこの字  
を忘る者あり

一 瓶子の口を包柳も又まよひし形よ包ハいふある  
いよれそと云よ菱ハ水多よ水底よまひしり志はる  
印のこも密く活きおこまひしり志はりかし

はよまを<sup>祝</sup>て申さしほもぬ類の扱ある者菱の花  
形よて目を包むあり

一 瓶子掬子よ祝の時和山鶴山たち花ハを蝶花形よそて  
付多し相おしりも色替りすよ年をも種多し

山たち花ハ多よぬても雪雪よいしまに實もたぬ  
染する物よ二所ともよめて交相お祝よ申る

一 瓶子を一急し二枝と云し四記よんし

一 瓶子の柄を包むるハあまするし京教お軍扇中よ  
は申とあましは瓶子柄を包ますと大流流武の  
指形記よ京教お軍扇の底ハ瓶子の柄を包むるハ尚  
流ハあましとあり染板持系記よは瓶子の柄包  
むる扇中よハあまするしとされハ柄を包む法武



東鑑花世

酒杯入一

折敷上

船子覆蓋

の覆蓋下

古今著述系

卷十四云

白河院深

雪朝雪見

ニ御幸アル

ヘシトテ中畧

杉葉ノカサニ

キタル童二八

ヒトリハ

沉ノ折敷ニ

玉ノ盃銀

四ニ金ノ指

モラレタルヲ

モチタリケリ

一八八斤口

ノテウシニ

サケヲ入テ

右斤クケテ

テウシトシ

付テモツク

ノヲモチ

ヨリアリシ

ヲ考ヘシ

いふ支るし

魚板持多記云此祝の時ハ片口にして或後記云

公方御成成とそ介さつとしたる時ハ片口にして

はをも包むるすあふ自然うし口ニ等時ありはそ

ハ江の包板より他流ハ木の葉を由い付あそあくの

るい一向あきつりいそそ条々中事云武三献常の二

内盃の時も此船子ハ片口可成し公方御成ハ三月

あケ日そ介節報ハうし口の此船子白し湯酒

も白酒云又此物移る片口にてりしあふれはうし口の

を包むし此陣の時もそ介祝言もうし口の船子を

可成るそ又そのせうし口の船子移り皆あり口斗り

ありて説きてりし右口ハ切後の人ハ酒の平す時けに

酒をわくあふは包と云ハあふりし常ハ切後人の

あふりし口ニ付て是ハ何すすもろ口のてりしハ大酒

あふりし客人入れれて吾時右の人ハもたの人ハ酒の盃入

すもあふはあふりし口を付しそ切後の用をまハ何す切後人

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より

酒の平す時常の如く花の口より酒をわく船子の持板

ハ常とすりてた右の口をわくて持て逆すし右の口より



















一 さい紙一の砂をまきあがりさい紙居の妻居の産後の  
産後てこの抱のへりていふ紙を越して食持香粉の紙をへ  
きえをも忘むるのしそ子細八因人を捕へて牢まお  
この室しる時牢の格子を産して外より食持湯水ホ  
を入れとあふ友常よお抱を産して、食持粉をへり  
さしりていむさいこの砂まらるるの産しゆめ事砂兼  
記おもんくしり

婚礼の時夫婦を返かいた先男より香くそを産を女よ  
さすこの陽陰の先まきり順之陰の陽の先まき逆之神代は  
伊弉諾の伊弉冉なる天の浮橋の上より夫婦の交を婚め  
ぬの時女神伊弉冉なる先詞をうけぬひを女の先より  
八宣しるぬるること神代婚語の作何じりる日本記

けり  
一  
けり  
十枚  
記  
合  
へ

神代巻よりいり男ハ女ハ先まきて産をのこてやまひ  
りり古代よりの礼也 婚礼の時も初め式三献以下夫婦いりり産  
さすやより香粉まき夫婦の産まひの時よてハ男より香粉てかよ  
さひこそれより心後ハゆめや女を我書とていふんまて産産ま九  
何のし男を先トするあり

一 産の産あるとよけは産本の花葉あるを作り  
さするの作りけはり花を本とすしけりり花とら末  
をうんあまてうすく削りてそれまて作る友けはり  
花とまきけりり花ハらりりよりある抱之形續古の葉  
能婚言 云ひえの山よりこけてけはり花けらるる傳  
の神は うんたれ合ん  
うより産のまよをいあへて作りしをけらるるを  
あそひけれも縁いこてむまびはきしる 傍却親妻  
弟も本も傳まらるといふあれとあまらりり

けり  
花  
十枚  
記  
合  
へ



くれり也 右の詞をよむにけつりまゝかんにて比叡の山にあつたりてた方  
 左の方と方をおけてあこの削り花を作りてきくひまを  
 をあませて御覧せしむる之はさうさうつきの香もよきしうまひあつ  
 されともけつり花は昔よりあり来る花は昔よりあり来る  
 又古今集 おのれ云二条伝春字のみやすん 可と甲はる之を  
 よめとよけつり 花 かなさやうりるをよませぬひるる文を  
 やまひで 花 花のあまゆきけつりめども咲りけつりは  
 このことあるとよしりぬ けめどもけつりまゝと云事古く傳文  
 三テの秘事の中を一つとしてあるよりんそ  
 傳文の義はさうさうして秘を以てしきめどい事なりつ甲はるは  
 けつり花をさくれしるめくしけつり花は捨の木をさくすつる  
 捨は花さくぬおれを教へ花の木はけつりさくめしむるとよめる程を  
 又上吉よりけつり花ある花は昔よりあり来る  
 一 東鑑卷二十四 御子重慶 蓋といふるつるさう蓋を重慶  
 と云ハ御子まゝ御しあまおし御りよおぬあまの程をふ  
 じりして重慶いふしるるを云ぬへ  
 一 蓬萊の巻の古もあり 東鑑卷四十九 正元元年 四月三日

蓋

一 ちりの地 下の地 けつり花の影も伝ふ  
 一 蓬萊の巻の古もあり 東鑑卷四十九 正元元年 四月三日  
 庚子晴入御 入道陸奥守高直是前は同事清直也  
 御方追風流 蓬萊 又藤原公方よ云君のこれまの  
 出下向を一部のめんわくうとんけとそん 南世もやる  
 めくらのを おのれ くみ君をいひ申すん ありら  
 のまじくみようをとちりとの入るよそいひあふん  
 しみくのはめさけの康りよはうら ぬみうらこのおま  
 よおやあまをわくしていそ

一 今世治養と云物昔もあき古く治養と云蓬萊も  
 治養の内之洲治養 おのれ けつり花の影を伝ふ海申の  
 治のまその海さくけつり花右の島のやまを洲治

一 永言室町及  
 行幸記云  
 志保山  
 治トアリ  
 洲治也































此車よりぬかひらるるは是車を尋ね物とゆふなり

一車より後より乗せて歩より下るるゆふなり 聖徳紀世三の巻 本宮跡集の巻

は次輿より前より降りて前より下るなり

一今世の如き物ありと云ふはあんと云物指を結構

よゆりありと云ふは本宮我指河津及ら後の巻

させぬ(中)まゆらされは俄よりあんと云物よむありと云

屍をうまの指て若和へこそゆりられと云あんと云

指ハ縁人をあやま加ふる少なる物と云物にあんなり

とも云ふは名抄より後輿和名アミタと何うはあんど

の字ありし 阿義以多

一ありの儀ハ八尺七寸三儀一統よりん也又同きよりすれ  
七尺六寸と云は二折ゆりてゆりの尺ゆりし

竹使  
タケコシ  
トヨム

一塵取と云物も輿の如く日蓮流法要録抄より塵取

初合する時の式抄より一折りありと云ふなり

よあてぬる一と何う又太平記巻九 降参下合 被降参

戦も痛手を負ひしゆりるる君もハあなす

塵取も昇斗して遠の流も来りらると何りあを

をこひしるゆりありあふこあひせせてまふハ

は似たりらる物ありありと云ふなり 中名瓦

一あんだのり又あをした云太平記巻十 降参及合 降参及合

四節入屋ヲ竹拂と云ふは血の付る帷ヲ上ハ霞ハと

ゆり

アンタノ  
カケヒラ

アンタ

カケヒラ



